

平成15年4月22日

報道関係各位

財団法人 日本リウマチ財団

平成15年度「ノバルティス・リウマチ医学賞」

受賞者決定

財団法人 日本リウマチ財団では、過日開催した「ノバルティス・リウマチ医学賞」の選考委員会において、平成15年度受賞者を下記のとおり決定いたしましたのでお知らせいたします。

記

受賞者 はやし よしお 林 良夫
徳島大学歯学部教授

研究テーマ リウマチ性疾患における病因抗原の解明と臨床応用へ向けた
基礎的研究

なお、授賞式は4月23日の第47回日本リウマチ学会評議員会で行われる予定です。

はやし よしお

林 良夫

昭和20年12月生まれ

徳島大学歯学部教授

略 歴：

昭和 47年 3月 東京医科歯科大学歯学部 卒業
47年 4月 東京大学医学部附属病院医員一助手（口腔外科）
50年 4月 東京医科歯科大学大学院医学研究科入学（病理学専攻）
54年 3月 同修了（医学博士）
54年 4月 徳島大学助手（歯学部口腔病理学）
56年 4月 同附属病院講師
62年 4月 東京都老人総合研究所研究員（基礎病理部）
平成 元年 5月 徳島大学教授（歯学部口腔病理学）現在に至る。

学会活動：

日本病理学会（理事）、日本免疫学会、日本リウマチ学会、日本癌学会

【受賞研究要旨】

リウマチ性疾患における病因抗原の解明と臨床応用へ向けた基礎的研究

難病とされるリウマチ性疾患の大半は原因不明であり疾患非特異的な治療法で対処しているのが世界の現状である。リウマチ性疾患を制圧することが可能な疾患特異的治療法の確立は 21 世紀医療にとって極めて重大な研究課題である。受賞者はリウマチ性疾患シェーグレン症候群の病因抗原として分子量 120KD の病因抗原 α -フォドリンの分離精製に成功し、その後、新生児エリテマトーデス、原発性胆汁性肝硬変など他のリウマチ性疾患患者血清中にも高頻度に抗原性を異にする同抗体が検出されることを明らかにした。膜タンパク α -フォドリンはアポトーシス関連プロテアーゼによって分断化を受ける基質タンパクであることから、リウマチ性疾患固有の膜タンパク破綻が病因抗原の成立に深く関与していることが示唆された。現在までの解析により、病因抗原 α -フォドリンの成立には Fas/Fas リガンド経路のアポトーシスが重要な役割を果たし、カスパーゼ 3 などの活性化を介した膜タンパク破綻機構が関与し、その特異的阻害剤によって自己免疫病態がブロックされることが確認された。また、生体内でユビキタスに存在する膜タンパクがシステインプロテアーゼの活性化をうけ病因抗原として機能しカテプシン S 阻害剤によって病態回復が可能であることが明らかにされた。従来まで、国内外の研究において患者血中自己抗体の解析により対応する核抗原の cDNA が数多くクローニングされ、その構造と機能が明らかにされてきたが、個別の疾患の病因解明には至っていない。本研究成果はリウマチ性疾患の発症に密接に関連する病因抗原の生体内での分子レベルにおける成立機序の解明によって病態抑制システムを確立する道を拓くものであり、近い将来、リウマチ性疾患の制圧を目的とした新規診断法・治療法の開発に寄与するものと期待されている。

【参考資料】

「ノバルティス・リウマチ医学賞」について

「ノバルティス・リウマチ医学賞」は、日本国内のリウマチ研究の発展、進歩に大きく寄与する可能性を有する独創的研究に対して与えられています。応募者は、リウマチ性疾患の基礎、臨床などの研究に従事する人々を対象としています。

当財団では、「リウマチの予防と治療に関する調査、研究およびその助成事業」を基本活動としており、この賞の創設もその一環となるものです。本賞は、日本チバガイギー株式会社（現：ノバルティス ファーマ株式会社）の協力を得て、平成2年に創設されました。平成9年4月に、日本チバガイギー（株）の医薬部門とサンド薬品（株）が統合し、ノバルティス ファーマ（株）として発足したのに伴い、名称が「ノバルティス・リウマチ賞」に変更されました*。

現在、「関節リウマチ」に冒されている患者数は国内で約70万人に達するといわれています。また、周辺疾患を持つ人までを加えると500万人とも全人口の15%ともいわれており、官民一体となったリウマチ対策が必要と考えております。

*平成13年度から「ノバルティス・リウマチ医学賞」に名称が変更になりました。

● これまでの受賞者（敬称略）

- 第1回（1990年）平野 俊夫
大阪大学医学部 教授
バイオメディカル教育研究センター腫瘍医学部門 腫瘍病理学研究部
テーマ：リウマチの発症機序とIL-6
- 第2回（1991年）池原 進
関西医科大学病理学第一講座教授
テーマ：骨髄移植による慢性関節リウマチ治療に関する基礎的研究
- 第3回（1992年）西岡 久寿樹
聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター 教授
テーマ：成人T細胞白血病ウイルスによる関節炎発症機構の解明
- 慢性関節リウマチの病因解析モデル -
- 岩倉 洋一郎
東京大学医科学研究所ウイルス感染研究部 助教授
テーマ：成人T細胞白血病ウイルスによる関節炎発症機構の解明
- トランスジェニックマウスによる分子生物学的検討 -
- 第4回（1993年）小池 隆夫
北海道大学医学部内科学第二講座 教授
テーマ：膠原病の血栓性病変と抗カルジオリピン抗体に関する研究

- 第5回(1994年) 笹月 健彦
九州大学生体防御医学研究所遺伝学部門 教授
テーマ：慢性関節リウマチの発症を規定する遺伝要因の解明
- 第6回(1995年) 橋本 博史
順天堂大学医学部膠原病内科 教授
テーマ：全身性エリテマトーデス(SLE)の母親から出生する
児の転帰・予後と治療法に関する研究
- 第7回(1996年) 森本 幾夫
東京大学医科学研究所ウイルス疾患診療部 教授
ハーバード大学 内科 Visiting Professor
テーマ：ADA結合蛋白CD26のT細胞免疫機能への役割
- その遺伝子工学的・生物学的解析
- 第8回(1997年) 山本 一彦
九州大学生体防御医学研究所臨床免疫学部門 教授
東京大学大学院医学系研究科 教授
テーマ：新しい方法論を基にした慢性関節リウマチの病因抗原の同
定
- 第9回(1998年) 岡田 保典
慶應義塾大学医学部病理学教室 教授
テーマ：マトリックスメタロプロテアーゼによるRA関節破壊の分
子機構
- 第10回(1999年) 吉崎 和幸
大阪大学健康体育部健康医学第一部門 教授
テーマ：サイトカイン産生異常の分子・遺伝子制御
- 慢性関節リウマチ、キャッスルマン病等をモデルとして -
- 第11回(2000年) 宮坂 信之
東京医科歯科大学医学部第一内科 教授
テーマ：慢性関節リウマチにおける滑膜増殖機構の解明と遺伝子治
療による人為的制御の試み
- 第12回(2001年) 後藤 眞
都立大塚病院リウマチ膠原病科 医長
テーマ：ウエルナー症候群遺伝子(WRN:RecQ型DNA/RNAヘリカ
ーゼ)による強皮症徴候発現機構の解析
- 第13回(2002年) 宮澤 正顯
近畿大学医学部教授
テーマ：抗gp70自己抗体移入による肉芽腫性血管炎の発症機序

(所属、役職は受賞当時)